

明治維新を成功に導いた薩長の 広報・IR戦略

1867（慶応3）年4月からパリで万国博覧会が開かれた。後にエッフェル塔が建つシャン・ド・マルス公園を会場に、約7カ月間にわたって開催された同万博には42カ国が出品し、1500万人が来場したという。

日本も初めて万博に参加した。ここで展示された浮世絵が印象派画家たちに大きな影響を与えたのをはじめ、焼き物や工芸品などが評判となり「ジャポニズム」のきっかけとなったことはよく知られる通りである。

日本の参加は主権国・フランスの勧めに幕府が応じて実現したもので、幕府は各藩にも呼び掛け、薩摩藩と佐賀藩も参加することになった。ところが幕府の代表団が会場に到着してみると、薩摩藩が幕府とは別のブースで出展し、しかも「薩摩琉球国政府」との看板が掲げられていた。驚いた幕府代表団は直ちに撤去を要求したが、薩摩は拒否し看板も降ろさなかった。両者話し合いの結果、薩摩は呼称だけは「日本薩摩太守政府」に改めることとし、幕府は「日本大君政府」として別々に出店することで折り合った。このため来場者の目には、日本には幕府政府と薩摩政府という2つの政府が並立しているかのような印象を与えたのだった。

それだけではなかった。薩摩藩は独自に「薩摩琉球国勲章」を製作し、ナポレオン3世をはじめフランスや各国政府の数多くの高官に贈呈した。この勲章は、フランスで当時から現在に至るまで最高の勲章とされるレジオンドヌール勲章に形状も大きさも似ていたようだ。薩摩藩が事前にフランスなど欧州の事情をよく研究して準備していたことが分かる。

この様子を見た幕府の代表団は慌てて「幕府も勲章を作るように」と本国に要請したものの、すぐに作れるはずもなく、万博は閉幕してしまう。幕府が作ろうとした勲章は「葵勲章」と呼ばれるが、その直後に幕府は崩壊したため、完成することもなく幻の勲章といわれている。

薩摩藩のパリ万博での行動は、今日でいえば広

報・IR活動である。こうして薩摩藩は国際的権威を高め、逆に幕府の威信を低下させることに成功した。当時、国内ではすでに薩長同盟が成立して倒幕の機運が密かに高まっていたが、それを英国が支援するのに対し、幕府側には

フランスが肩入れするという構図ができつつあった。それだけに、パリ万博を舞台にした薩摩の広報・IRの効果は大きかった。フランスは幕府への援助に及び腰となり、一方で英国は薩摩との協力体制を強化していったのだった。

巧妙な広報・IRを展開した薩摩に対して、幕府にはそうした戦略がなかった。これが両者の明暗を分ける重要な節目となったことは間違いない。広報・IRの巧拙が企業の命運を左右することの典型例といえる。

さてパリ万博が閉幕して6日後、日本では大政奉還が行われ、その2カ月余りに鳥羽・伏見の戦いが勃発した。この時、幕府軍の兵力数の方が多かったにもかかわらず、薩長軍が最新型の大砲などで優勢となった上に「錦の御旗」を掲げたことをきっかけに幕府軍が総崩れとなり敗北する。

錦の御旗は直接的には、味方の兵士の士気を高める一方、幕府軍を「朝敵」に追いやって動揺させるといふ、双方の兵士に向けられたものだったが、同時に薩長軍の正当性を広くアピールすることを狙った「広報」でもあった。薩長は戦いが始まる約3カ月前から錦の御旗の製作を始めていたといわれており、ここにも周到な広報戦略ぶりが表れている。明治維新は広報・IRの勝利でもあった。



岡田 晃
(おかだ・あきら)

大阪経済大学大学院客員教授・経済評論家。
日本経済新聞社編集委員、
「ワールドビジネスサテライト(WBS)」マーケットキャスター、テレビ東京経済部長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長などを歴任。